

山ノ井南野遺跡Ⅲ

福岡県筑後市大字山ノ井所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第64集

2005

筑後市教育委員会

やまのいみなみの
山ノ井南野遺跡Ⅲ

(山ノ井南野遺跡2次調査)

2005

筑後市教育委員会

序

本書は、平成16年度に行った山ノ井南野遺跡2次調査の埋蔵文化財調査報告書であります。

当市は、古代の幹線道路であった「西海道」が南北に縦断していたことが過去の発掘調査や歴史地理学で明らかにされ、大字羽犬塚から大字鶴田までの約3.3kmがほぼ一直線に繋がる古代道路跡として推定されています。今回の発掘調査では、西海道跡の調査が山ノ井南野遺跡3次、4次調査で行われ、本報告である山ノ井南野遺跡2次調査では、その西海道の東に隣接する箇所にあたるため、新しい発見に繋がることが期待されました。

尚、本書が、学術資料としてだけではなく、地域の文化財の理解と認識を深める一助になれば幸いです。

最後になりましたが、本報告書の刊行にあたり、本報告に関係したすべての人々に感謝の意を記したいと思います。

平成17年3月

筑後市教育委員会
教育長 城戸一男

例　言

1. 本書は平成16年度に筑後市教育委員会が行った山ノ井南野遺跡2次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物・図面・写真等は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第Ⅰ章に記している。
3. 本書に使用した図面の遺構実測図は上村英士、阿比留士朗が作成し、遺物の実測、浄書は仲文恵が行った。
4. 本書に使用した遺構・遺物の写真撮影は上村、阿比留が行う。
5. 今回の調査に用いた測量座標は、国土調査法第II座標系を基準としており、方位は全て座標北(G.N)である。
7. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による。
SD—溝　　SK—土坑　　SP—ピット
8. 本書の執筆・編集は阿比留が行った。

目　次

I.調査経過と組織	1
II.位置と環境	2
III.調査成果	3
IV.小結	13

I. 調査経過と組織

発掘調査に至る経過は、平成15年12月に開発予定地の埋蔵文化財の取り扱いについて筑後市教育委員会に照会があり、これにより開発関係者との協議を行った。協議の結果、開発予定地が推定西海道跡隣接地であることから試掘調査を行い、遺跡が確認されたため開発予定地内の本調査を行うことで合意した。また、発掘調査から報告書までの費用を原団体である城戸交司枝、肥後橋トシコ氏に負担いただいた。調査は平成16年4月から7月まで行い、整理及び報告書作成については、平成16年度内に筑後市文化財整理室にて行った。

なお、発掘調査及び整理作業の関係者は次のとおりである。

調査組織

1) 平成15年度（事前審査）

総括	教育長	牟田口和良（～9/30）
		城戸一男（10/1～）

庶務	教育部長	菰原修
	社会教育課長	松永盛四郎
	文化スポーツ係長	成清平和
	文化財専門職	永見秀徳 小林勇作
	文化財学芸員	上村英士（事前審査、試掘担当） 立石真二

1) 平成16年度（調査・報告書）

総括	教育長	城戸一男
	教育部長	菰原修
庶務	社会教育課長	田中僚一
	文化スポーツ係長	成清平和
	" 主査	綾部純
	文化財専門職	永見秀徳 小林勇作 上村英士
	文化財学芸員	立石真二 阿比留土朗（調査報告担当）

5) 発掘調査参加者

地元有志

6) 整理作業参加者

整理補助員	平塚あけみ	仲文恵
整理作業員	野間口靖子	野口晴香 横井理絵 佐々木寿代

II. 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地では果樹園や茶畠、東部や南西部では米麥中心の田園地帯が広がる。市街地は、国道に沿って市の中心部に形成されている。

今回報告する山ノ井南野2次遺跡は市中央部の南東よりに位置し、標高15m位の低地に立地する。周辺には縄文時代の落とし穴が確認された「長浜鍾遺跡」や、当遺跡の東側には古代官道である西海道が南北方向に走っており、市内調査事例では、「鶴田中市ノ塚遺跡」「羽犬塚山ノ前遺跡」「山ノ井川口遺跡」等があり良好な残存状況であった。北東方向には、中世の流路跡である「徳久中牟田遺跡」があり、当遺跡周辺には、各時代の遺跡が点在している。

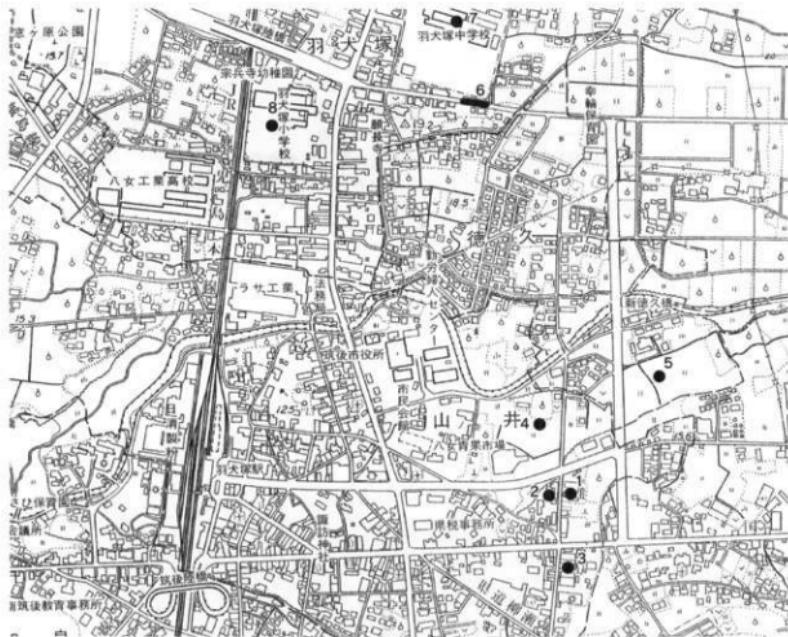


Fig.1 周辺遺跡分布図

III. 調査成果

(1) はじめに

当遺跡は、筑後市大字山ノ井南野662、663-1に所在し、位置と環境でも述べた通り標高15m程度の低地に立地していて、遺跡周辺の現況道路面の標高も約15.1mであり、調査区の遺構検出面はその現況道路から、約0.5m程下げた、標高約14.6mである。調査対象面積は1300m²であるが、この土地は、調査が行われる以前には屠殺場がついていた経緯があり、調査区北側半分は、この屠殺場の建設もしくは、解体の際に掘削されており、搅乱状態であった。その為に調査は調査区南側を中心に行った。

遺構番号は、基本的に遺物が出土した遺構に付いているが、遺物の出土をしなかった焼土を含む土壤や、埋土が若干あるが硬化したピットにも遺構番号を使用した。

調査期間は平成16年4月9日から同年6月30日までである。重機による表土掘削は（有）徳光建設に依頼した。

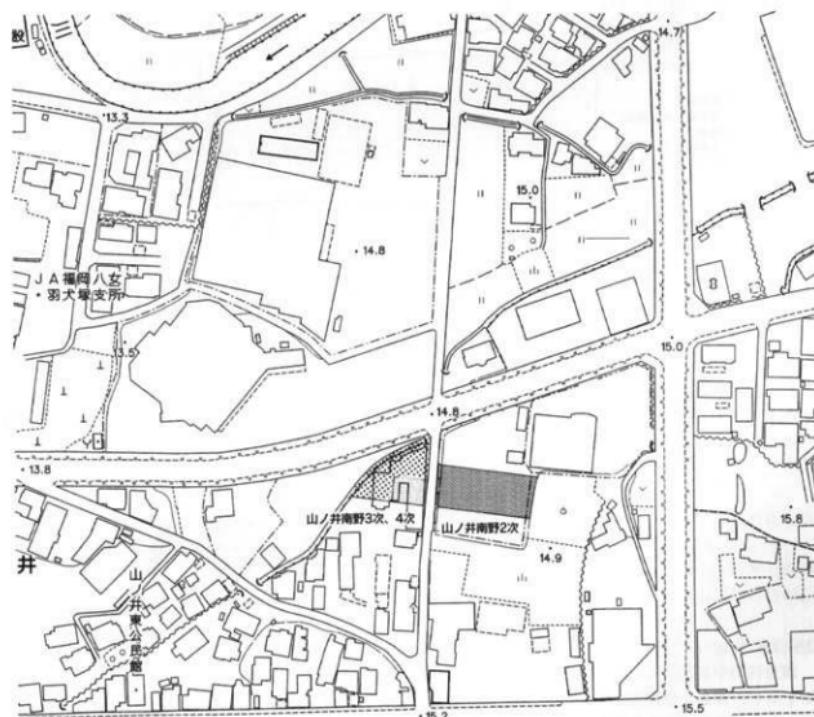


Fig.2 調査区配置図

(2) 検出遺構

土壤

2SK05 (Fig.3, Pla.3)

調査区中央より南に位置し、平面プランは、長軸2m、短軸1.4mの長方形を呈し、深さは検出面より0.6m弱である。検出面より0.1~0.2mの深さで1層焼土層があるが、遺構内部に被熱した箇所はない。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

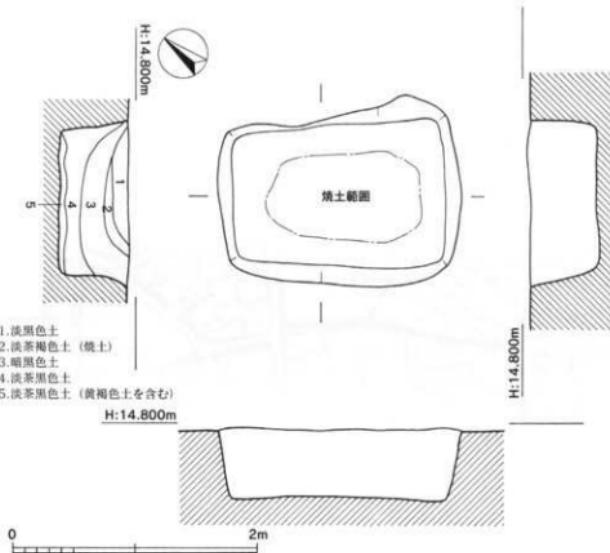


Fig.3 2SK05 平断面図及び土層図 (1/40)

2SK17 (Fig.5)

調査区中央部よりやや西側に位置しており、SD01を切る。平面プランは、0.5m×0.6mのはば円形を呈す。深さは、検出面より約0.2mを測る。

出土遺物 (Fig.4)

(1) 須恵器甕体部細片である。焼成は悪く、外面、明灰茶色、内面、明赤茶色の色調を呈す。外面には格子目叩き痕と内面には同心円の当て具痕が明瞭に残る。

2SK18 (Fig.6, Pla.4)

調査区の中央部より、やや西よりに位置しており、平面プランは、長軸は1.3m、短軸は0.9mの梢円形を呈し、深さは検出面より0.7mを測る。検出面から0.2m~0.3mあたりから袋状に膨らみ、床面は平坦となる。遺物は出土しておらず時期は不明である。

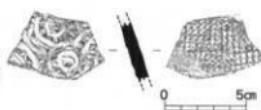


Fig.4 2SK17 遺物実測図 (1/3)

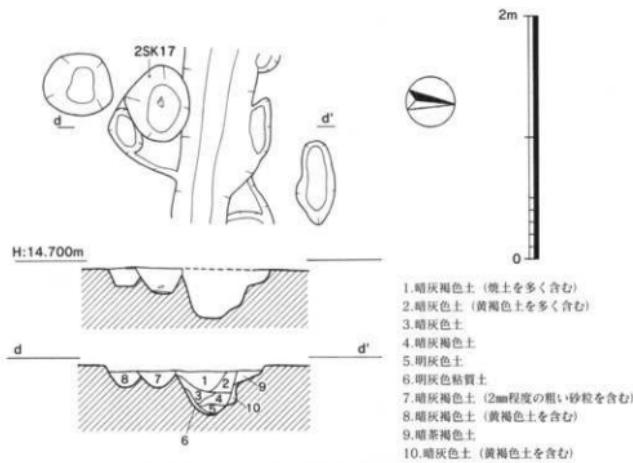


Fig. 5 2SD01、2SK17 平断面図及び土層図 (1/40)

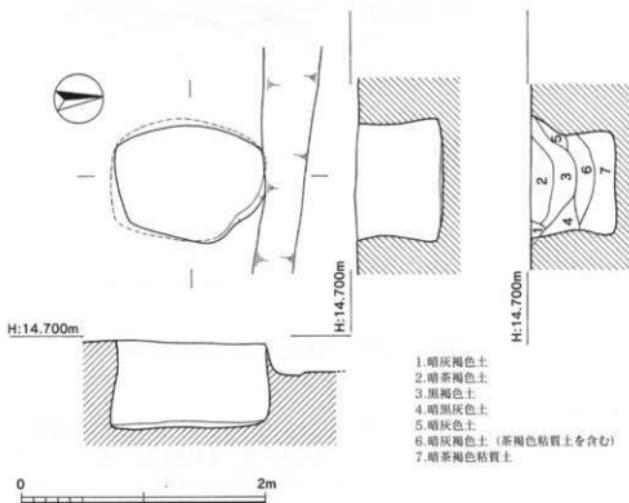


Fig. 6 2SK18 平断面図及び土層図 (1/40)

2SK19 (Fig.7, Pla.4)

調査区の中央部より、やや西側に位置しており、2SD01に切られている。この遺構の、平面プランは長軸2m、短軸1.4mの長方形を呈しているが、複数のpitや土壌が重複しており深さは深い所で0.2m、浅い所で0.1mで、遺構の切り合いで新旧関係は不明である。出土遺物は、数点出土しているが、細片であるために、図化するに至らなかった。

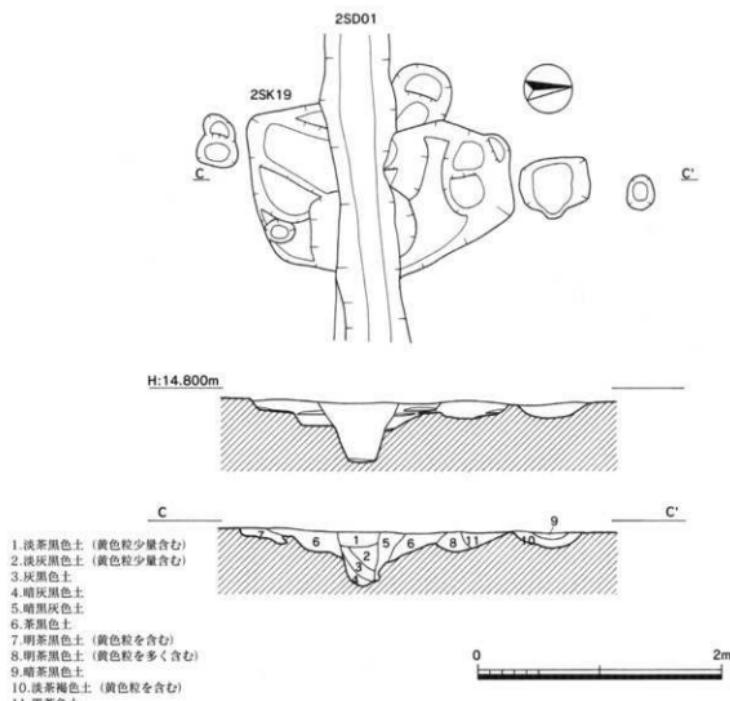


Fig.7 2SD01, 2SK19 平断面図及び土層図 (1/40)

2SK25 (Fig.8, Pla.5)

2SD01に切られている、長軸3.6m、短軸0.8mの楕円形プランで、深さは0.45mを測り、基本的な断面形態は舟底状を呈すが¹、北側部分では、2つの中段を有す。南側部分は、浅いピット状の窪地となり、その西側には階段状に2つの中段を設ける。埋土は填圧されたのか硬化しており、遺構内底面も若干の硬化が見られた。

出土遺物 (Fig.9)

(1) 青磁口縁部細片である。細片である為に器種や施文については不明。釉調は明黄茶色を呈し、胎土は明灰色である。

(2) 須恵器体部細片である。焼成は良く、内外面とも明灰色を呈する。外面は、平行叩き後ハケメ調整、内面は平行の當て具痕が残る。

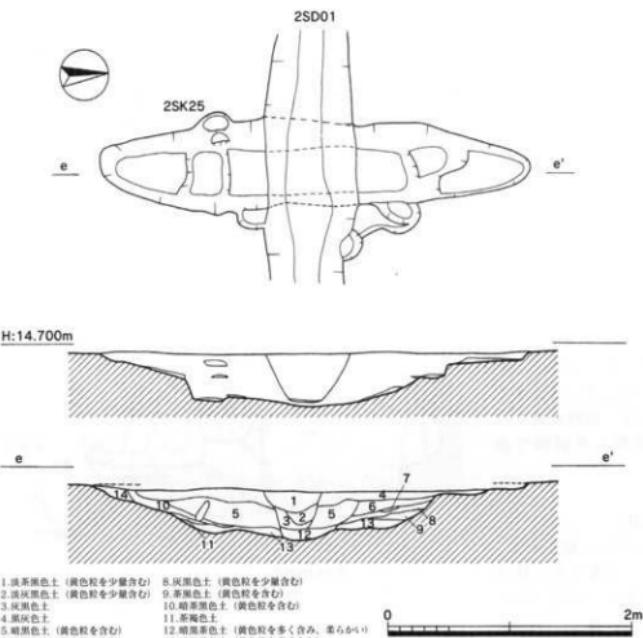


Fig.8 2SD01、2SK25断面図及び土層図 (1/40)

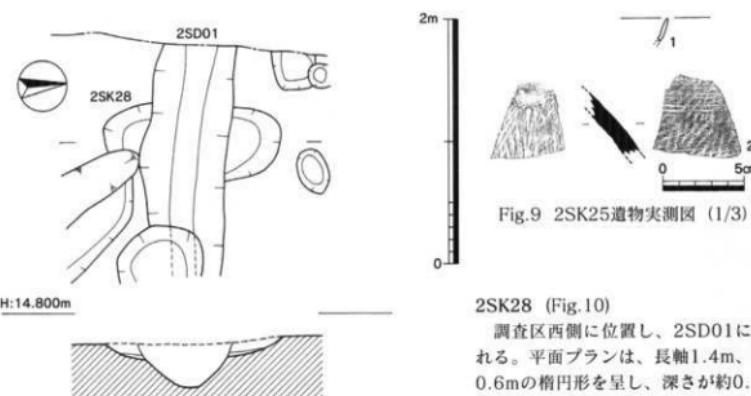


Fig.10 2SD01、2SK28断面図 (1/40)

2SK28 (Fig.10)

調査区西側に位置し、2SD01に切られる。平面プランは、長軸1.4m、短軸0.6mの楕円形を呈し、深さが約0.15mを測る。

出土遺物

2SK28 (Fig.11)

- (1) 須恵器壺の口縁部細片である。
- (2) 須恵器の体部細片である。焼成不良の為に外面は暗赤褐色を呈す。外面は格子目叩き痕、内面は同心円の当て具痕が残る。

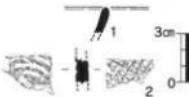


Fig. 11 2SK28遺物実測図 (1/3)

2SK30 (Fig.12)

2SD10の西側に位置しており、2SD10に切られる。5cm程度掘り下げたのち遺構の切り合が認められた為に細分した。

2SK30a

0.6m×0.7mの平面プランはほぼ円形を呈す。深さは検出面より0.1mを測る。出土遺物は瓦器の細片であり、図化するに至らず、磨耗が著しい為に調整も不明瞭である。

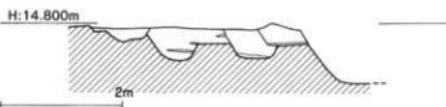
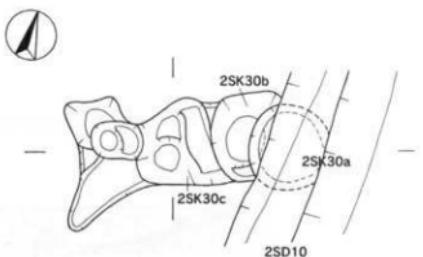


Fig. 12 2SK30平断面図 (1/40)

2SK30b

2SK30aに切られる。0.7mの平面プランはほぼ円形を呈し南側に中段を設ける。深さは検出面より中段面0.1m、遺構底面0.2mを測る。土師質土器片が出土したが、細片であり図化するに至らず、磨耗が著しく調整不明瞭である。

2SK30c

2SK30bに切られる。0.7m×0.7mの隅丸方形を呈す。東側に一段の中段が付く。深さは、検出面より、中段までが0.1m、底面は0.2~0.3mである。土師質土器が数点出土しているが、すべて細片の為、図化するに至らなかった。

2SK31 (Fig.13)

2SD10の東側に位置しており、2SD10に切られる為、遺構の半分は消滅している。複数の遺構が切り合っており、5cm掘り下げた段階SK31と、南側の中段を設ける深さ0.1mほどの土壙2SK31aと、東側にある深さ0.2mの2SK31bから遺物が出土した。2SK31b出土遺物は細片の為に図化するに至らなかった。

出土遺物

2SK31 a (Fig.14)

- (1) 土師器の甕口縁部片である。内面は摩滅しているために調整不明で、外面ヨコナデである。胎土に赤色粒子が多く含まれる。

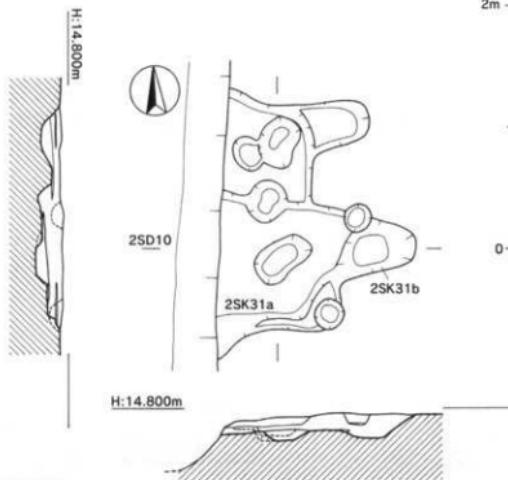


Fig. 13 2SK31平面図 (1/40)

(2) 土師器の甕口縁部片である。内面ヨコナデ、外面ハケメ後ヨコナデ調整である。胎土には角閃石がよく入り、明黄褐色である。

(3) 土師器の甕口縁部片である。内外面とも摩滅しているために調整は不明である。胎土には赤色粒子がよく入り、明黄褐色である。

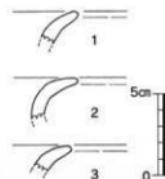


Fig. 14 2SK31a遺物実測図 (1/3)

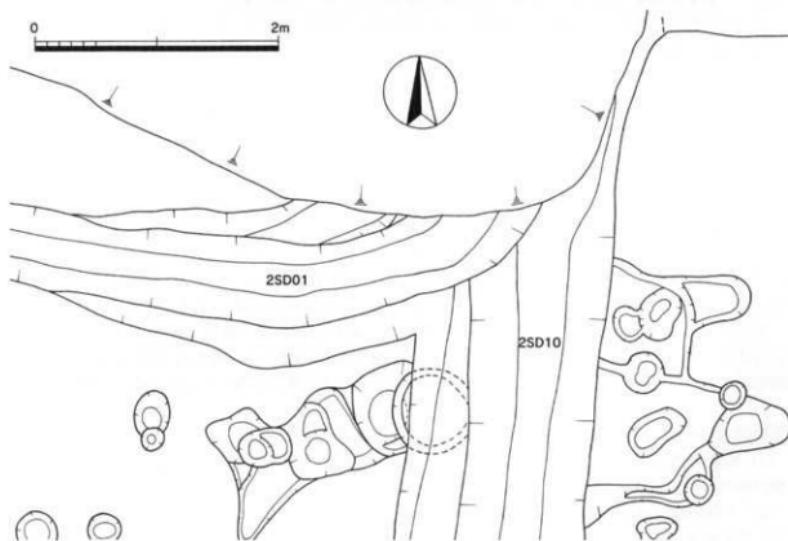


Fig. 15 2SD01.2SD10平面図(1/40)

溝

2SD01

調査区中央部よりやや南側よりを東西方向に走り、2SD10手前から北側方向に屈曲していく溝である。溝の規模は、検出された長さが約25m、幅が0.5m~1m、溝の底面幅が0.2m~0.4m、検出面からの深さが0.5m前後を測る。土層観察の結果、この溝の機能時期は少なくとも3段階あり、溝が最初に掘り込まれた時期とその溝が掘り直された溝は、ほぼ同規模程度であるが、北側方向に屈曲する際に東側へ若干移動する。最終段階の2SD01は、検出面より、深さ0.2m~0.3mと浅くなっている。

出土遺物 (Fig.16)

(1) 土師質甕口縁部片である。復元口径26.1cmを測る。口縁部と体部を接合するため貼り付けた痕跡がみてとられる。内面の調整は、接合部上面で横方向のハケメが施されており、それより下面の体部側は目の細かいハケメが横方向に施されている。また、口縁部は横方向にケズリ後、ヨコナデを行なっている。口縁端部はヨコナデをし、余った胎土を下方に折り返している。しかし、内面の調整に比べ、外側の調整はあまり行

なわれず、器壁が細かく凸凹している。胎土は石英や長石が多く粗製である。

(2) 瓦器楕片である。内外面とも摩滅しているために調整が不明であるが、外面の一部に若干ミガキが見られる。色調は灰白色である。

(3) 瓦器楕底部片である。貼り付け高台で見込み部分にはミガキが施されている。色調は灰白色である。

(4) 青磁細片である。文様部分の細片であり、鎧蓮弁文で細蓮弁をなすタイプである。釉は厚くかかり、釉調はグリーンに発色しており、胎土は灰白色をなす。Fig.17SD01、SD10、3層出土。大宰府編年Ⅲ類にあたる。

2SD10

調査区中央東側よりに走る南北溝である。溝の規模は、検出された長さが8mあまりであり、北側は搅乱により消滅している。この溝は、上面幅が1m~1.2m、底面幅が0.2m程、深さ0.5m~0.6mの段階と、最終段階の上面幅1.7m~1.9m、深さが0.2m~0.3mの浅く幅広の溝がある段階との2段階の時期があり、最初に掘り込まれた段階の溝はSD01に切られるが、最終段階の浅い溝は、平面上ではSD01を切っているように見られたが、土層断面では、切り合い関係は明瞭ではなく、深さもSD01の最終段階とは同じ深さの為、SD01、SD10の最終段階では「T字状」に浅く溝状に残っていた可能性が高い。

出土遺物 (Fig.18)

(1) 青磁碗体部片である。胎土は灰白色で、釉調はオリーブ色を呈している。外面に回転ヘラケズリ痕があり、内面には文様等がないために無文碗と思われる。

(2) 土師器片口鉢口縁部細片である。残存状況が悪いが、口縁部が外側に張り出しているので注ぎ口部と思われる。

(3) 白磁碗体部片である。胎土は白色で釉調は少し青味かった白色を呈している。外面は回転ヘ

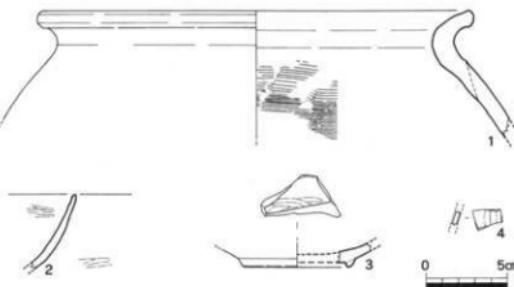


Fig.16 2SD01遺物実測図 (1/3)

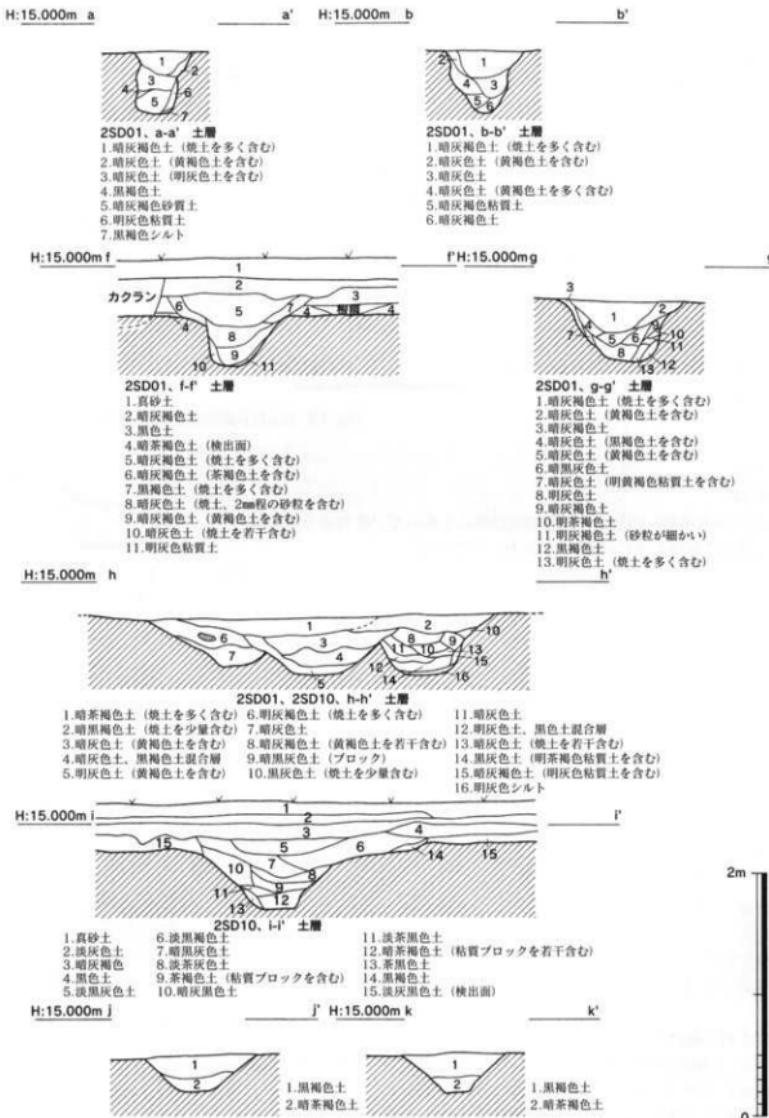


Fig.17 2SD01.2SD10.2SD15土層図 (1/40)

ラケズリによる成形痕が残っており、体部下半に露胎部分となっているところが若干あるが見てとれるため、華南産白磁と思われる。

(4) 砂岩製の砥石である。三面を砥石面として使用している。

2SD15 (Pla.6)

調査区南東隅を南北に走る。検出幅0.8m~0.9m、底面0.2m~0.3m、深さは検出面から0.3mを測り、逆台形を呈する溝である。溝の底面は畝状を呈している。遺物は細片が数点出土している。國化出来るレベルではないが、みじん唐草文の肥前器磁細片が出土しており、概ね19世紀中頃以降の近世溝と思われる。

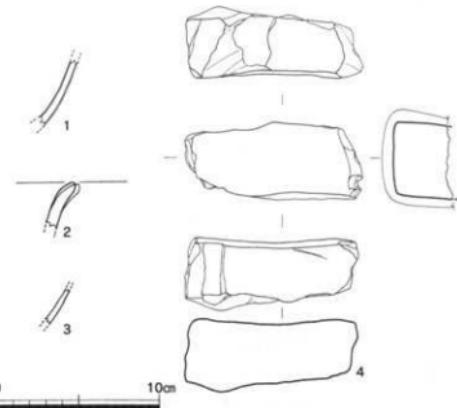


Fig.18 2SD10遺物実測図 (1/3)

ピット

2SP24

2SD10の東側に位置して南側調査区外にかかっているため半分程度しか検出されなかった深さ0.1mのピットである。

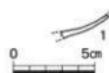


Fig.19 2SP24遺物実測図(1/3)

出土遺物 (Fig.19)

(1) 青磁皿体部片である。底部が露胎となり、二次被熱により釉調が明黄褐色に変色している。

2SP29

2SK19西側に位置しており、SD01を切っている。長軸0.35m、深さ0.2mを測る梢円形を呈するピットである。



Fig.20 2SP29遺物実測図(1/3)

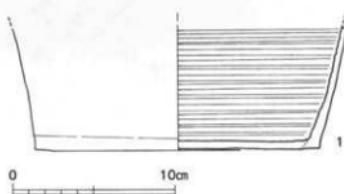
出土遺物 (Fig.20)

(1) 瓦器枕口縁部片である。内面には波状にミガキが施されており、外面上部に指頭圧痕が残っており、下部にはミガキが施されている。

包含層

黒色土

検出面上層にある層である。Fig.17 SD01.f-f'土層3層、SD10調査区南壁土層4層にあたる。



黒色土出土遺物 (Fig.21)

(1) 土質鉢である。内面は3mm程度の工具を使用してケズリを行なっている為に細かい段が残る。外面は丁寧なヨコナデによる調整を行なっている。

IV. 小結

今回の調査では、遺構と遺物の絶対量が少なく、遺構では2SD01、2SD10が主であり、今回の考察も、これらの遺構を中心に行った。まず、2SD01と2SD10の切り合いは、はじめにSD10が調査区の南側に抜けるように南北方向に掘られている。2SD10は残存する長さが8mあまりであるため遺構底面の高低差があまりない。次に、調査区の東西方向に走っている2SD01が掘られる。この2SD01は2SD10に合流するように北方向に屈曲しているために、屈曲した後の2SD01は2SD10を踏襲するよう重複して掘られていたと思われる。この2SD01の遺構底面は西側に向かって低くなっているので、埋土にも水の流れた痕跡があるために、水を調査区の西側へと流す為の用水路だと考えられる。そうなると2SD10も北側から南側に水を流した用水路だと思われる。

現在は、位置と環境のところでも述べたように、北に山ノ井川と南に花宗川とに挟まれた位置に当遺跡は立地している。しかし、両河川とともに、近世に整備された河川である。南側に位置している花宗川は矢部川から分流し、八女市、筑後市、三瀬町を通り大川市で筑後川に合流する人工的に作られた河川である。『筑後市史』によると、「この河川の名称や経緯は詳らかではないが、古くは平松川・焼林川の名称も使われていた。現在は、この川の開削施工に着手したといわれる柳川藩主立花宗茂の功を表して、その名を取り花宗川と称するようになったと言い伝えられている。」とある。立花宗茂は天正15年(1587)に柳川に入国したが、関ヶ原の戦いで西軍に味方したため改易された後、元和6年(1620)にふたたび柳川城主として入国する近世期の人物である。一方、北側に位置している山ノ井川も星野川から分流し、八女市、筑後市、三瀬町と大木町の町境を西流して、城島町で筑後川に合流する人工河川であると、『筑後市史』に記載されている。それによると、「八女市山内の星野川に築造された山ノ井堰から取水し、人工開削の水路で忠見地区へ導く。」とあるが、「山ノ井川の上・中流域は、忠見北部、豊福、宅間田台地からの自然流水を集め流水の多い河川となる。」とも記載される。そうなると、山ノ井堰が開削される以前は、忠見北部、豊福、宅間田台地より下流域では、人工河川ではなく、自然河川であった可能性が高く、実際に『筑後市内遺跡群』山ノ井川口遺跡調査報告では、弥生時代に比定される自然流水が溝状遺構から出土しており、その報告のなかで、「当遺跡で捉える一連の溝は、山ノ井川の前身である自然河川であった可能性が考えられる。」とある。山ノ井川口遺跡は、当遺跡から北西に100mあまり離れた場所に位置し現、山ノ井川より南側に位置し東西に流れている。よって、2SD01、2SD10の主体となる13~14世紀にかけての景観としては、整備される以前の山ノ井川が現在の山ノ井川より当遺跡より位置しており、水量があり、供給できる状態であったために、山ノ井川が水源として用いられた。そのため2SD01は北側から入り西側に流した水路になったのだろう。

当遺跡の西側には、6m幅の現況道路を挟み、山ノ井南野3次調査が行われており、西海道跡が検出されている。そちらの調査報告書は『山ノ井南野3次』調査報告書に詳しく報告されているので詳細はそちらの報告書にまかせる。が、そのなかで、1) 道路面に施工痕と思われる箇所が一部検出される。そうすると、遺跡の残存はきわめて良く当時の状況を残す。2) 山ノ井南野2次と3次の遺構検出面のレベル差があり、0.6m~0.7mほど3次調査区の方が低くなっている。1)、2)の理由によりこの場所の西海道は、片側切り通し状の道路施工と想定される。また、3) 3次調査西海道跡では、東側側溝に溝が踏襲されて掘られるが、13世紀代には埋没されている。そして、それより新しくなる遺構が検出されてない。4) 検出面直上に水田層が確認される。よって、2SD01は、片側切り通し状になっている西海道跡地を水田に転用する際に作られた溝であると考えられる。13~14世紀にかけては日本の各地域で用水路が発達する時期にあたり、当該地域でもそのような農地の拡大がはかられたと推測できる。

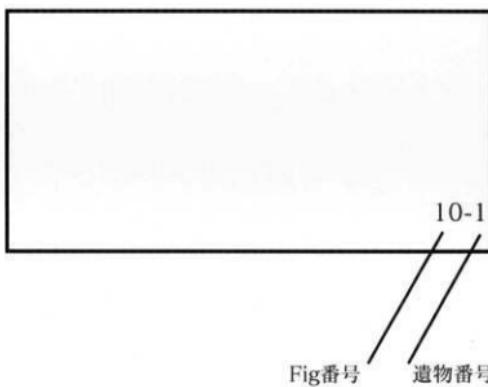
[参考文献]

- 筑後市史編さん委員会・編 『筑後市史』 筑後市史編さん委員会 (1998)
小林勇作 「山ノ井川口遺跡」 『筑後市内遺跡群N』 筑後市文化財調査報告書第45集 筑後市教育委員会 (2002)
小野正敏編 「図解・日本の中世遺跡」 東京大学出版会 (2001)

P L A T E

凡例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。

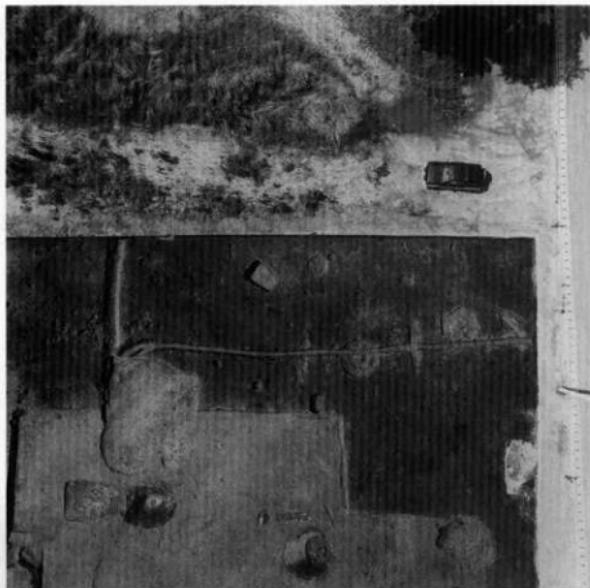




山ノ井南野遺跡第2次調査全景（南から）



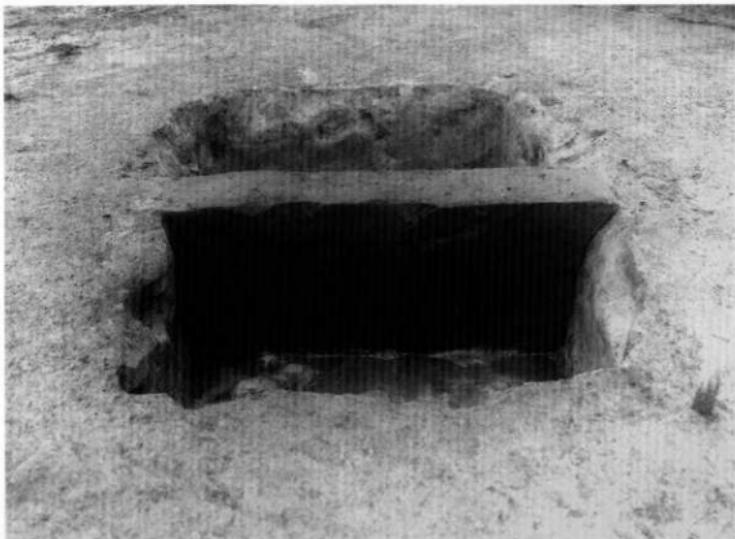
山ノ井南野遺跡第2次調査全景（北から）



山ノ井南野遺跡第2次調査区東側



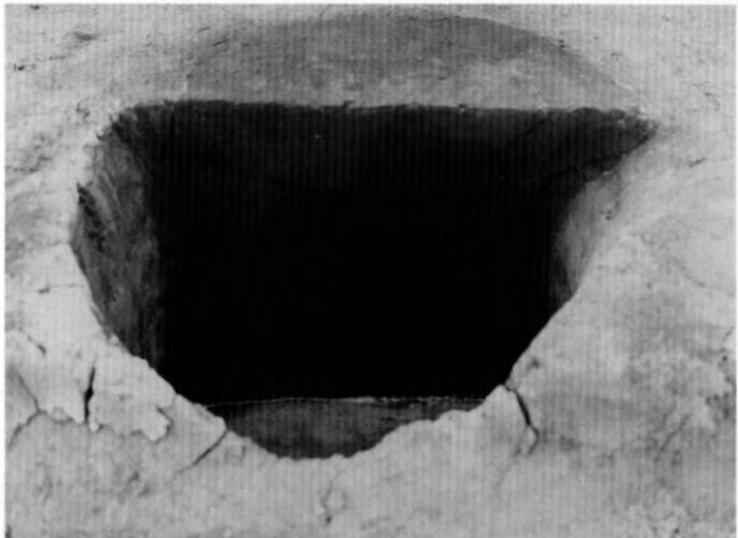
山ノ井南野遺跡第2次調査区西側



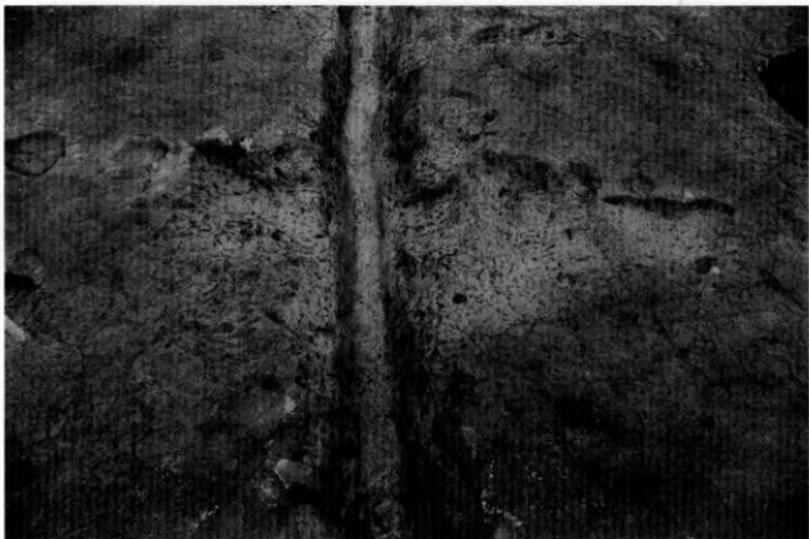
2SK05土層（北西から）



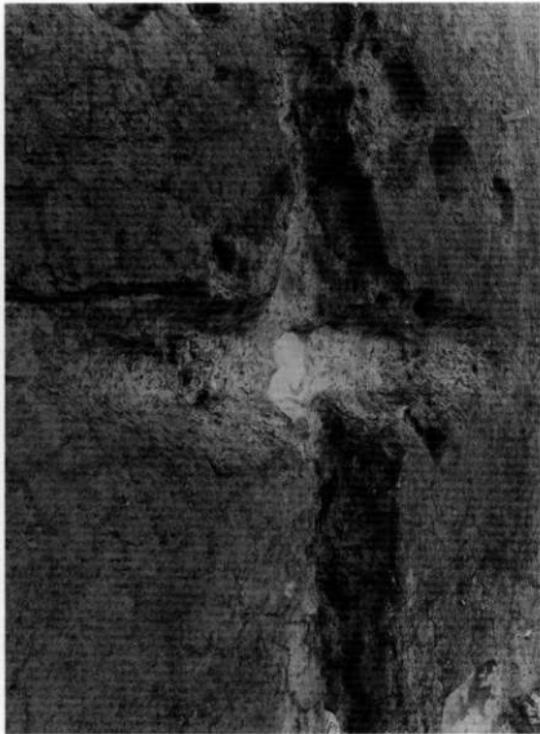
2SK05完掘状況（北西から）



2SK18土層（北から）



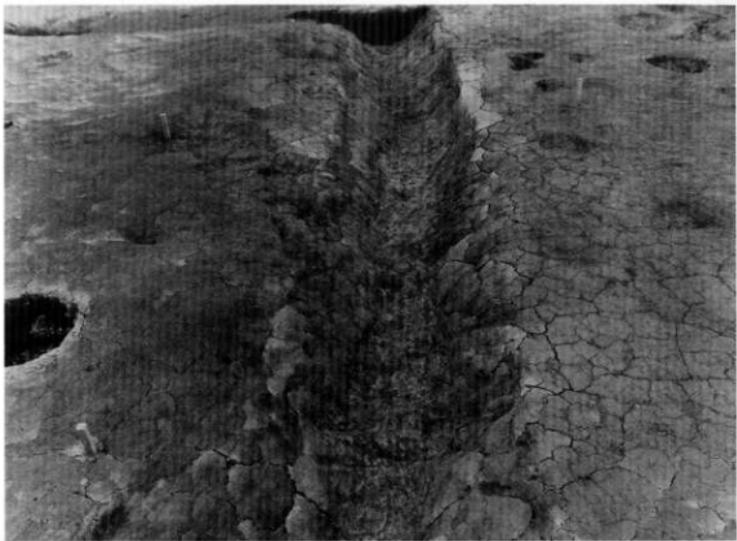
2SK19完掘状況（東から）



2SK25完掘状況（北から）



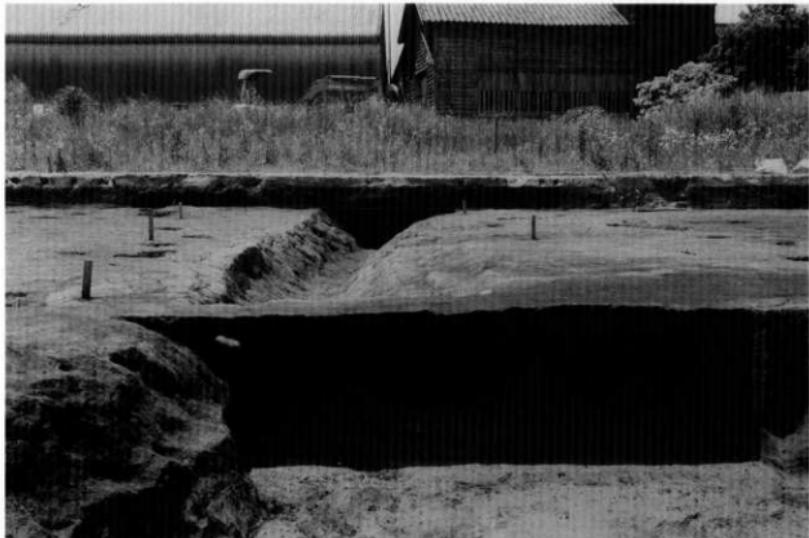
2SD01、2SD10（東から）



2SD10完掘状況（南から）



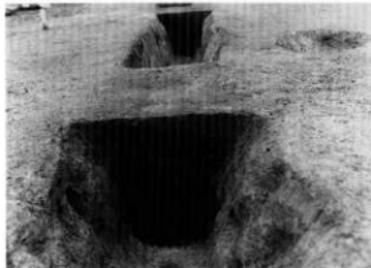
2SD15完掘状況（北から）



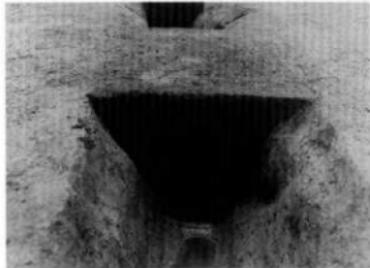
2SD01、2SD10土層



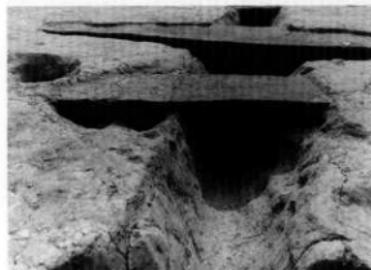
2SD10南壁土層



2SD01.a-a'土層



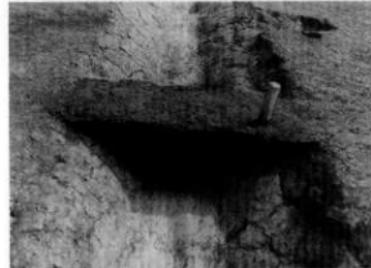
2SD01.b-b'土層



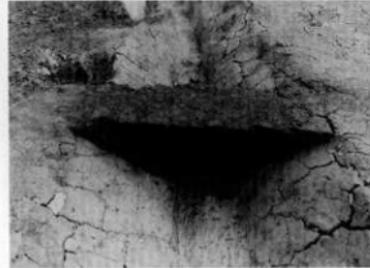
2SD01.d-d'土層



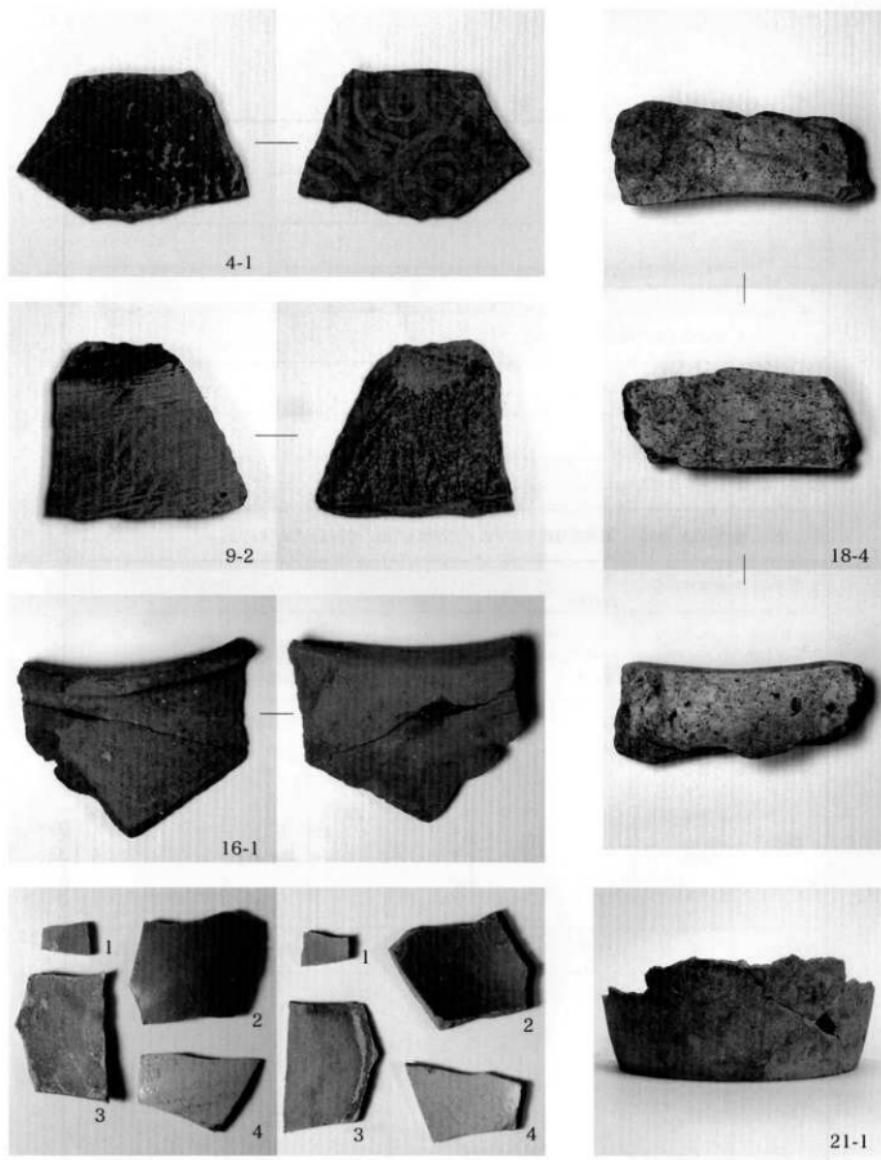
2SD01.g-g'土層



2SD15北側ベルトj-j'土層



2SD15南側ベルトk-k'土層



出土陶器

- | | |
|----------------|----------------|
| 1. 青磁 Fig.16-4 | 3. 青磁 Fig.19-1 |
| 2. 青磁 Fig.18-1 | 4. 白磁 Fig.18-3 |

山ノ井南野遺跡Ⅲ

福岡県筑後市大字山ノ井所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第64集

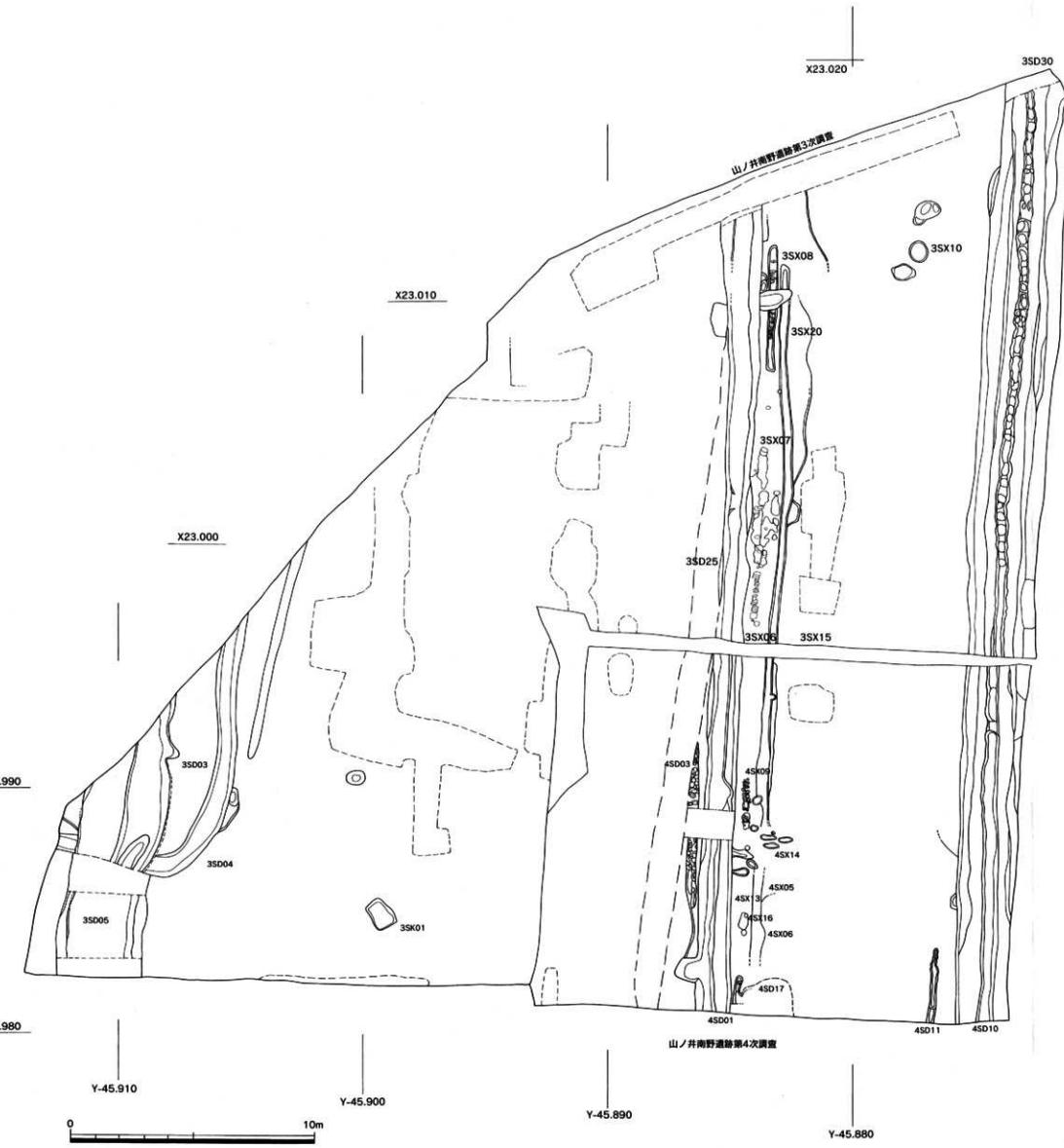
平成17年3月31日

発 行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井898

印 刷 (資) 四ヶ所印刷

福岡県甘木市大字馬田336



2SP01	土師器	甕口形、杯片
	瓦器	甕片
	陶磁器	青磁片
2SP02	—	—
2SP03	—	—
2SP04	—	—
2SK05	—	—
2SP06	—	—
2SP07	—	—
2SP08	—	—

2SK09	土師器	細片
2SD10	土師器	鉢片、細片
	陶磁器	青磁片、白磁片
	石製品	砾石
2SK11	土師器	賣口絆細片
2SK12	土師器	杯片
2SP13	土師器	細片
2SK14	土師器	細片
2SD15	土師器	細片
	陶磁器	柒付片
2SK16	土師器	細片

2SK17	
上師器	細片
須志器	實體部片
2SK18	
—	—
2SK19	
土師器	細片
2SP20	
瓦器	細片
2SP21	
土師器	細片
2SP22	
土師器	細片
2SD23	
—	—
2SP24	
陶磁器	青磁底部片
2SK25	
須志器	實體部片
陶磁器	青磁口緣部片

2SP26	磁器	染付皿片
2SP27	土師器	細片
2SK28	須恵器	細片
2SP29	土師器	細片
2SK30	土師器	細片
2SK31	土師器	夷口縁片
	瓦器	鏡口縁片、底部片
	陶磁器	青磁片
2SP32	—	—
2SP33	—	—
黑色土	土師器	鉢片

